言語研究（*Gengo Kenkyu*）**142**: 1–28（2012）

【会長就任講演】

アフリカ人のコミュニケーション
――音・人・ビジュアル――

梶　　茂　樹
京都大学

【要旨】サハラ以南のアフリカは，いわゆる無文字によって特徴づけられてきた。しかし無文字社会というのは，文字のある社会から文字を除いただけの社会なのだろうか。実際に現地で調査をしてみると，そうではなく，われわれの想像もつかないようなものがコミュニケーションの手段として機能していることがわかる。本稿では，私が現地で調査したもののうち，モンゴ族の諺による挨拶法と太鼓による長距離伝達法，テンボ族の人名によるメッセージ伝達法と結縄，そしてレガ族の紐に吊るした物による諺表現法を紹介し，無文字社会が如何に豊かな形式的伝達法を持ちコミュニケーションを行っているかを明らかにする。無文字社会では，言語表現が十分定形化せず，いわば散文的になるのではないかという一般的想像とは逆に，むしろ彼らのコミュニケーションは形式的であり韻文的である。それは文字がないことへの対応様式であり，共時的に，そして世代を通して伝達をより確かなものにする努力の表れと理解できるのである。

キーワード：アフリカ，コミュニケーション，諺，命名法，太鼓言語

1. はじめに

未知の言語を調査した際，調査者は調査成果として語彙，文法，テキストをいわば3点セットとして残すことになる。実際の調査においては語彙，文法，テキストのそれぞれに多大な時間を割いているにも拘わらず，多くの場合，論文として公表されるのは，音韻を含めた広い意味での文法に関してである。語彙，テキストが論考の対象となることは文法に比べて少ない。

私は，長年アフリカで言語調査を行ってきた。そして自分も含めたこのテキスト軽視の姿勢に一種の後悔とやり切れなさを感じてきた。実際の問題としては，テキストの取り扱いを軽視せざるをえないことも理解できる。無文字言語の場合，ひと通りの語彙と文法の調査が終わると，次にやるべきはテキストの記録とその分析である。文字のある言語の場合は小説や新聞を題材にデータを集めることができるが，無文字言語の場合は自分でテキストを集める以外にデータを得る手段はないのである。そして多くの場合，調査者は民話・昔話を録音して文字化の作業を行う。

しかしながら，民話は20～30編も集めて分析すれば，それ以上継続しても出てくる新しい単語はせいぜい2，3個ということになるし，また新しい構文も出てくることも稀である。問題は，こうやって集めた数10編の民話をどう処理するかで

ある。意味も構文もすべて分かっている。そういうものに対して形態素分析を加え，グロスをつけることは，自分としては分かっていることに対して，黙々と後始末をつけるという無意味な作業に思えてくるのである。それよりも，次の知らない言語を調査する方が意味があるのではないか。これが私が膨大な数の民話を集めながら，ほとんど発表してこなかった大きな理由である。

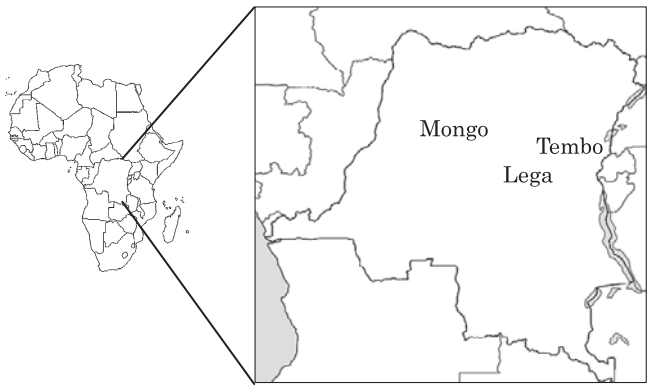
しかしながらテキストというのは民話だけではない。民話以外にも様々なジャンルのものが存在する。そういう風に思うようになったのは，民話を精力的に集めテキスト化しようとしていた時である。民話は多くの場合，タイトルがない。題は何かと聞くと，場合によっては最初の出だしのところを言ったり，最後の結論の部分を言ったり，はたまた内容をまとめたりと様々なことがなされる。そして，しばしば内容をまとめる際に，諺で表現するということに気がついた。実際，民話には諺に通じる教訓的な内容のものが多いのである。また，民話，諺などを同じ単語で表す言語も多い[1]。そう考えると，民話の長い長い，そして生き生きとしたストーリーは子供たちにも飽きさせずに聞かせるための方便で，言いたいことは諺で表現できるのではないか。そう考えた時，アフリカの口承文芸の中心にあるのは諺ではないかと思うようになった。そして諺がどのような場で現れてくるかを，気をつけて見るようになったのである。

日本では日常生活において諺に出くわすことは稀である。例えば，何かの総括の時に，「2 度あることは 3 度ある」と言ったり，「弘法も筆の誤り」と言ったりすることはあるが，多くは諺辞典を見たり，あるいは辞書を見たついでに見るのであって，日常生活に密着して現れることはない。しかし，アフリカでは日常生活の多くの場面で現れてくるのである。

本稿は，私の言語調査を通して得たアフリカでのコミュニケーションに関する知見を，諺を中心としたテキスト分析の成果をベースにまとめたものである。アフリカ，とりわけサハラ以南のアフリカは，伝統的に無文字社会であるということに大きく特徴づけられており，そこから来るコミュニケーションのあり方は，他地域と大きく異なる様相を呈している。本稿では，私が調査した言語・文化から 5 つの事例を選び，その特徴を明らかにすることによって，一般に無文字的社会におけるコミュニケーションがどの様に行われているのかを考える一助としたい。具体的には，モンゴ族（Mongo）の諺による挨拶法，テンボ族（Tembo）の人名のつけ方，レガ族（Lega）の物による諺の表現法，テンボ族の結縄，そしてモンゴ族の伝達用太鼓によるコミュニケーションである。モンゴ族，テンボ族，レガ族は，いずれもコンゴ民主共和国（旧ザイール）に住むバンツー系民族（部族）で，1970 年代，80 年代に私が現地で調査したものである（地図参照）。そこでは，一般に無文字社

[1] 例えばモンゴ語の bokóló は，諷喩（allégorie），寓話（fable），物語（conte），諺（proverbe），演劇（théâtre），見かけ（apparence）を意味する（Hulstaert 1957）。またテンボ語でも múáni は，諺のみならず教訓的民話も表す。

会のコミュニケーションというものが喚起する無定形というものとは逆に，むしろ文字がないからこそ形式にのっとったコミュニケーションが行われていることが理解できるのである。



地図　コンゴ民主共和国（旧ザイール）における本稿言及部族の位置

2. モンゴ族の諺による挨拶法

まず最初にモンゴ族の諺による挨拶法を紹介し，アフリカの諺への導入としよう。モンゴ族は，コンゴ盆地の中央部から北西部にかけて居住する大きな民族である[2]。

彼らは，目下の人が目上の人に会うと，「おはようございます」とか「こんにちわ」などの普通の挨拶はできない。何と言うかというと losáko[3] と言うのである。そしてこれを言われると言われた方は諺で返さなくてはならない。例えば，「象は自分の象牙が重いからと言って文句を言ったりしない」というようなことを言う。これを言わないと次の行動に移れないのである。次の行動とは，そのまま別れる，改めて「おはようございます」と挨拶する，行なっていた作業を続けるなどである。モンゴの人たちは 17，18 歳になると，それまでの自分の人生を振り返ってみて最も印象的だったことを諺で表現し，それを挨拶用に用いるのである。そして目下の者に挨拶をされると，いつもその諺で応える。それは，その人の，いわば座右の銘である。

Losáko と挨拶されることは，挨拶される方にとって喜びである。人がこう挨拶するのは，相手が尊敬できる人であり，生きる指針を求めうる人であると認識して

[2] 国際 SIL によれば話し手数 40 万人となっているが（Lewis 2009: 113），モンゴ系すべてを合わせると数百万人になるのではないかと思われる。

[3] 以下 losáko については Hulstaert（1959），梶（1990b）参照。この 2 つの報告は調査地が異なるせいか，多少観察が異なる。本稿は主として梶（1990b）に従う。なお，losáko という単語は Hulstaert（1959）は「荘厳な挨拶法」と訳している。この語は -sák-「叩く」という動詞語根から派生されており，恐らくかつては，この語を口にするのではなく，現在も幾つかのアフリカの首長性社会で行われているように，相手に柏手を打って挨拶をしていたのであろう。そしてその後，この語を口に出して挨拶をするように変わってきたのだと思われる。

いるからである。挨拶は，まず目下の者―これは通常年下の者―から年上の者に行われるが，年下の者が学校の先生など社会的に地位の高い人の場合は，今度は，改めて年上の者が年下の社会的地位の高い相手に losáko と挨拶する場合もある。男女は関係ない。通常はたんに Losáko とは言わず，Losáko, tatá!「ロサコ，お父さん」，Losáko, mamá!「ロサコ，お母さん」と言う。tatá「お父さん」，mamá「お母さん」という称号をつけるのは，実際の父母だからというわけではなく，相手を父母のように見て尊敬しているという意味である。以下，梶（1990b: 420–423）から諺例を幾つか紹介する。

(1)　a.　Mbomba wâte lilako.「侮辱は忠告。」
意味：侮辱されると人はそれを発奮材料にして頑張るものだ。

b.　Ngómbá la ngómbá batákúmánáká ɲê.「山と山とは出会わない。」
意味：たとえ君は出て行っても，いつか我々はまた出会う。山と山とは出会わないが，人と人は出会うのだ。

c.　Lɔ́ɔ́ átóbúnge bomwa ɲê.「手は決して口を忘れない。」
意味：いま自分があるのは誰のおかげかを考えて，その人に当然なすべき感謝をしろ。物を食べる時に手は必ず口の所に行くように。

d.　Nganja íumá ífokoki betálé fiɔ ɲê.「すべての木は同じ高さではない。」
意味：人それぞれである。世の中には金持ちも貧乏人も，年寄りも若者もいる。それが世の中というものだ。

e.　Motéma wâte sandúku.「心は箱。」
意味：君の怒るのは分かるが，人間，何でも口に出すものではない。箱に蓋があるように，君の怒りも心の中に蓋をしてしまっておきなさい。

ではどうしてモンゴの人たちが諺で挨拶をするかと言えば，それは彼らが無文字社会に生きているということと関係している。この点は，後に触れるとして，ここでは挨拶のような場面でも諺が出てくるということを念頭において，以下の話を進めよう。

3. テンボ族の命名法

テンボ族はコンゴ東部に住み数万人の人口を有する[4]。彼らの人名に最初に興味を持ったのは，その意味がすぐわかり，しかも多様な内容を含んでいるためである。先にも述べた様に，文字のない言語は，一通りの語彙と文法の調査が終わった時，もう少し調査を続けようと思えば，自分でテキストを集める以外にない。そういう場合，最も最初に集められるテキストは，実は人名である。民話を録音しテキスト化するには，それなりの用意と心構えが必要であるが，人名はせいぜい数音節の長

[4] 国際 SIL によれば人口 15 万人という多い数字になっているが（Lewis 2009: 117），私は 1976 年当時，村役場の人口統計から 4，5 万人と見ていた。

さであり，しかも人はどこにでもいるわけであるから，データは造作なく集められる。そしてそれは一編のテキストを構成し，さらに文学でさえある。そして面白いことに，名前の意味はすぐに分かるのである[5]。

テンボ族の人名には後で述べるように幾つか種類があるが，まず最も重要な誕生名の例を幾つか示し，そのイメージを掴んでいただくことにしよう。誕生名は子供が生まれて数日のうちにつく。命名者は，主として子供の父親あるいは母親である（稀に祖父母の場合もある）。最近では村役場に，通常父親が出生届を提出する[6]。

例えば，テンボ族では，málírá「涙，喪，葬式」という名前の人にしばしば出会う。これは kúlírá「泣く，（人の死を）嘆く」という動詞から派生された普通名詞である。これが名前となる。どういうわけかと言うと，テンボ族の社会では親族が死ぬと 1 週間喪に服す。そしてその間に子供が生まれると，男の子であれ女の子であれ，この名前がつくのである。われわれの社会では人が死ぬと「どこそこの何衛門，何々により死去，享年何歳」と文字に書くところであるが，彼らの社会には文字がない。人の死を記憶の中に留めておくというのは，例えば彼らの祖先霊崇拝という宗教的側面にも現れているが，人名もそのために用いられるのである。

ここで話し言葉と文字表記との違いを考えてみよう。話し言葉の大きな特徴は 2 つある。1 つは，近くの人は聞こえるが遠くの人は聞こえないという空間的制限であり，もう 1 つは，今この場にいる人は聞こえるが後から来た人は聞こえないという時間的制限である。ところで，もし出来事が名前の中に埋め込まれたらどうなるであろうか。その子はあと数 10 年生きるであろうから，出来事は数 10 年間記録として保持される。これは話し言葉の持つ時間的制限を打ち破っている。また子供は小さい時は行動範囲は限られるが，長ずれば数 10 キロを移動する。これはすなわち，話し言葉の持つ空間的制限を打ち破って機能しているということである。

人の名前の中に出来事を刻んでおくというものは多い。もう 1 つ例を挙げると，男性名で hábitá，女性名で nábitá というのがある。これは「戦争」を意味する普通名詞 bitá に，それぞれ，男性を表す接頭辞 há- と女性を表す接頭辞 ná- をつけたものである。強いて言えば，「戦夫」，「戦子」である。この名は，戦いがあった時に生まれた子供ということであるから，その子の年齢から逆算数すれば，いつ戦いがあったかが推測できる[7]。このように，人の名前は出来事を記録し，文字のない社会においては歴史の研究においても貴重なデータとなっているのである。

また，これもよくある名前であるが，ndáméŋaa「私は知らなかった」というのがある。結婚前の女性はテンボ族社会においても，結婚そして夫というものに対してある種の期待を抱いている。しかし実際に結婚してみるとひどい人間だと分かったということがある。酒癖が悪い，人を殴る，給料は家に入れないなど。そういう

[5] 人名の言語的形式については梶（1985b）を参照。
[6] ただしこれはノートに書かれるだけで，日常生活においては何の機能も有さない。
[7] もっとも，後で見るように，名前は継承されることがあるため，すぐさま，その出来事がその人の生まれた年に起こったということにはならないことに注意すべきである。

時に子供が生まれると，妻がこの名前をつけるのである。「私は自分の夫がこんなにひどい人だとは知らなかった。」というわけである。後を続ければ，「もし知っていたら結婚しなかっただろうに。」ということであるが，これは言わない。しかし了解されている。これなどは，妻の夫に対するメッセージと考えなければならない。あたかも手紙を書くように名前をつけるのである。

読者の中には，もし妻がそう思っているのならどうして口に出して言わないのか，と思う人がいるかもしれないが，妻は口を酸っぱくして言っているのである。しかし，例えば酒癖の悪い人というのは，妻に言われたぐらいで直るであろうか。もし直れば，酒癖の悪い部類には入らないであろう。ところで，もしそのことが子供の名前になったらどうであろうか。夫としたら，いつも自分の目の前に「私は知らなかった」ちゃんがいるわけであるから，これは堪らないということになる。単に口で言うよりも，子供の名前に埋め込む方が，メッセージとしてずっと大きな効力を発揮するのである。それは，名前がメッセージを運ぶと同時に固定化する役割を担っているからである。

逆に夫から妻へのメッセージには，例えば bálumé「男（pl.）」というのがある。これは男の子によくつく名前であるが，実は単に「男」と言っているのではなく，格言 Bálumé babíka.「男というものは耐えねばならない。」の最初の部分を取ってきたものである。従って，強いて言えば「男というものは」である。bálumé は múlumé「男（sg.）」の複数形である。こういう名前がつくのは，妻が性悪女で，そこいら中で問題を起こすのであるが，男というものは，そういうことで動じてはいけないという意味である。要するに，妻がひどいと言っているのである。夫の妻へのメッセージである。

テンボ語の言い方に ésina lya múso「謎々の名前」というのがある。言いたいことはあるのだが，全部は言わない。そして諺や格言の一部を取ってきて名前とする。もちろん，父親なり母親が子供に名前をつけた時，誰も自分はこういうことがあって，こう思ったのでこういう名前をつけましたと言う人はいない。ある日，突然，名前としてメッセージが送りつけられてくるのである。その意味は，分かる人にはわかるし，分からない人にはわからない。しかし同じ社会に生き，同じ文化を共有する者として，そのメッセージの意味はたちどころに理解されるのである。

上では名前のメッセージ性を理解していただくために，妻から夫へ，そして夫から妻へという夫婦間のメッセージの交換の例を見てきたが，メッセージが交換されるのは，何も夫婦間に限ったことではない。あらゆる人間関係において可能なのである。アフリカの人名の研究では，それが表す内容の豊富さから，ついつい「愛」「嫉妬」「お金」など，内容に基づいた分析がされてきた。しかし私は，アフリカの人名の特徴はそのメッセージ性にあるとの認識から，名前は，メッセージの発信者と受信者の関係で分析できると考える。アフリカの多くの社会では，個人名は，たんにその人を他の人から区別するだけでなく，特定の人に対するメッセージとなっているのである。

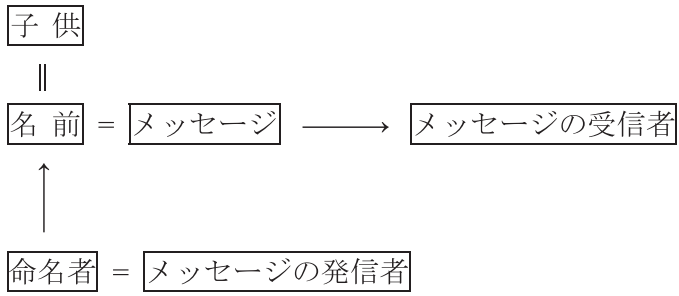


図 1　名前にはメッセージの発信者と受信者が関与する

ここでメッセージの発信者というのは子供の名前の命名者であり，これは通常，子供の父親あるいは母親である。そしてメッセージの受信者というのは，命名者が一言言いたい相手である。これには様々な人間関係がある。また人間関係だけではない。神に対して言うこともあれば，後世の時代の者に対して出来事を伝えるというものもある。従って，メッセージは，共時的メッセージと通時的メッセージに分けることができる。そしてさらに，双子が生まれた時の特別な名前もある。以下，それぞれについて例を示す。

3.1. 共時的メッセージ

共時的メッセージとここで呼ぶものは，あたかも手紙を書くように相手にメッセージを伝えるものである。以下，名前をメッセージの発信者と受信者の人間関係により分類する。

(2)　名前の共時的メッセージ

1. 夫から妻へ

a.　bálumé「男というもの」
この名前は既に上で述べたように，格言 Bálumé babíka.「男というものは耐えねばならない。」の最初の主部の部分を取ってきたもので，父親が男の子につけることが多い。

b.　lúbíngó「連れ戻し」
テンボ族の女性は結婚して 3 日と経たないうちに，もし何か気に食わないことがあると，実家に帰ってしまう。夫が迎えに行っても，しばらくするとまた実家に帰るということを繰り返す。これはテンボ族の男性に言わせれば，妻が夫の愛を試しているということになる。もしすぐに迎えに来れば愛は深いし，そうでなければ愛はあせているのである。そういうことを繰り返しているうちに子供ができると，夫がこの名前を子供につける。意味は「お前，いい加減にしろ。」ということである。

c.　máhá ma ndéré「乾いたバナナの葉っぱの束」
この名は，夫が子供は自分の子供ではないということを確信している場合につける。ndéré「乾いたバナナの葉っぱ」というのはよく燃える物の代名詞で，テンボ族では焚き付けに用いる。「乾いたバナナの葉っぱにつけた火は，いくら隠そうと思っても隠せない（火のない所に煙はたたない）。オレの子ではないという証拠は máhá「束」のようにあるんだ」というわけである。

2. 妻から夫へ

a.　ndáméŋaa「私は知らなかった」
この名については，すでに上で述べた。夫がひどい場合，妻がつける。

b.　byému「身に覚えのないこと」
byému という単語は,「不条理, 不可能, 無茶苦茶なこと, 身に覚えのないこと」などと訳せる語である。こういう名が子供につくのは，人に不条理なことを言われて，それに反論する場合である。例えば，上で述べた，夫に,「それはオレの子供ではないのではないか。」などと言われた場合である。「そんな身に覚えのないことは言わないでください。これはあなたの子供です。」と反論しているわけである。

c.　simiré「愛する人」
夫婦間のメッセージの交換は, 何も相手の行為をなじるものばかりではない。この simiré「愛する人」というのは，Simiré ataáya.「愛する人は（相手の嫌なことも）嫌うことはない。」（あばたも笑窪）の主部を取ってきたものである。妻が夫に惚れぬいて結婚した場合につける。「私はあなたを愛している。」という妻の夫への愛の確認である。

3. 夫妻相互間

a.　másimano「相愛」
夫婦がまだ愛し合っていた頃生まれた子供。

b.　maáyané「嫌い合うこと」
こういう名前がつく場合は，まず間違いなく離婚後に生まれた子供である。

c.　makúrúmáŋá「一緒にするもの」
離婚しようと思っていたが，子供が生まれたので留まった。子はかすがい。

4. 夫から兄弟へ

a.　bwira búbúyá「良い友情」
諺 Bwira búbúyá búkulu kú búuma.「良い友情は兄弟関係に勝る。」（遠くの親戚より近くの他人）の主部を取ってきたものだ。この子の父親がお金で困って兄弟のところに行き借金を頼むのであるが，誰もお金を貸してくれない，しかし友達が助けてくれた, ということで, 兄弟を叱責するメッセージとなっている。「兄弟はお互い助け合って一族を盛り上げていかなければならないのに，自分は兄弟が悪くてそうはできない。」という意味である。

b.　motʃiré「彼を軽んじている人」
諺 Motʃiré atamwékera haó.「彼を軽んじている人はその人の荷物を持ってあげない。」の主部を取ったものである。これは自分の弟が自分を尊敬していないと感じた時につける名前である。テンボ社会では，2 人が旅行する時，目下の者は目上の人の荷物を持ってあげるのが普通である。しかし自分の弟はそうしない。「弟は弟らしく兄に対して振る舞え。」という意味である。

5. 子から親へ

a.　wet'éʃi「父親のある者」
格言 Wet'éʃi ílí éte byóʃí.「父親のある者は全てのものを持っている。」の主部を取った名前である。自分が結婚する時，婚資金で苦労したが父親が助けてくれた。「お父さん，ありがとう。」という意味である。3 世代が関係していることに注意しよう。命名者である子供の父親，メッセージの伝達者である子供，そしてメッセージの受信者である子供の祖父，すなわち命名者の父親である。

6. 親から子へ

a.　wákulire「成長した者」
Wákulire í mbángirwa.「成長した者はヤムイモだ。」の主部を取ったものである。この諺の意味するところは，「人は成長すると自分が小さかった頃のことを忘れて自慢するものだ。」ということである。これは自分の子供が小さい子の面倒を見ない時に，親が叱責の意味を込めてつける。「そういうお前も小さい頃は鼻をたらしたり，おしっこをもらしていたのだ。」というわけである。ここでは子供 3 名が係わっている。大きい順に A，B，C とすると，A が B の面倒を見ないのである。そして親が，生まれた C にこの名をつける。メッセージの相手は A である。

7. 妻から嫁ぎ先家族へ

a.　búíririre「悪意」
諺 Búíririre buteta.「悪意は人を殺さない。」の最初の部分を取ったもの。女性は一般に嫁ぎ先で，みんなから悪意を持って見られているというステレオタイプ化した感情を持っている。とりわけ妊娠は妬みを生みやすく，「あんなヤツ妊娠がうまくいかず死んでしまえ。」と思われるのであるが，「私は，そんなのにはめげず立派に子供を産んだ。」という反論になっている。

b.　kúsímwá「愛されること」
女性が嫁ぎ先で姑などと仲が悪い。姑は近所で「うちの嫁はどうしてあんなにひどいのかね。ケチで怠け者で。」などと不平，不満をこぼす。「うちの息子も息子だね，よりにもよってあんな女と結婚して……。結婚したのはしようがないけど，どうして離縁しないのかね。あれはきっと息子に惚れ薬を飲ませているに違いない。」などと言うわけである。それを聞いた隣人は，その女性に，「あなたのところのお母さん，こんなことを言っていたよ。」と伝

える。そうすると嫁も反論しなければならないが，それを子供の名前に託するわけである。「夫が私を離縁しないのは惚れ薬云々ということではなくて，私が素晴らしいからだ。愛される人は愛されるべくして愛されるのだ。」嫁も負けてはいない。

8. 夫（夫婦）から隣人へ

a.　lúkoó「情け」

諺 Lúkoó mwinda.「情けは謝金である。」の主部から取ったもの。「情けをかけるとかけられた方はそれを謝金と感じ，いつかは返すものなのに，アイツは今オレがこんなに苦労しているのに助けてくれようともしない。」ということで，昔情けをかけてやった人に対する叱責の意味が込められている。

b.　múíʃá「運，ツキ」

諺 Émúíʃá wá mbene atá í wámbulí.「山羊のツキは羊のツキではない。」の最初の語を取ったもの。この子の父親が，お金が入る，いい職業についたなど，チャンスが巡ってきた。しかし隣人がそれを妬んでいる。彼らの社会では妬まれると邪術をかけられるなど，ロクなことがない。従って，妬まないで欲しいというメッセージを発さないといけないが，この諺の一部を取ってきて子供の名前にするわけである。「確かに私はツイているが，それは山羊のツキなんだ。あなたにはあなたのツキがあって，それは羊のツキなんだ。あなたにもきっとツキは回ってくるから，今私がツイているからと言って妬まないで欲しい。」と言うわけである。

9. 夫婦から神へ

a.　ńgulu「賛美」

なかなか子供ができなかった。そしてついにできた。神を讃える。

b.　mungó áwere「心のつかえは取れた」

ある女性が流産を繰り返していた。自分はもう子供はできないのではないかと思っていたが子供ができた。心のつかえは取れた。名前が１つの文になっていることに注意。

3.2. 通時的メッセージ

ここで通時的メッセージというのは便宜的命名で，出来事を名前の中に刻んでおき，メッセージを後世に伝えるというものである。

（3）名前の通時的メッセージ

1. 妊娠時の状況

a.　fúkéjní「ガサゴソ動くこと」

妊娠中，子供がお腹の中でガサゴソと動いていた。

b.　kálala「キャッサバの葉っぱ」

妊娠中，この子の母親がキャッサバの葉っぱを好んで食べていた。

2. 出生時の状況

a. byanʤírá「道でのこと」
母親が産気づいて産科に急いだが，間に合わず道で産んでしまった。道で産んだためひどく苦労したという意味。

b. kásóko (m), násóko ～ n'ésóko (f) < esóko「市場」
市場で，あるいは市場のある日に生まれた子。あるいは市場への行き帰りに生まれた子。

3. 誕生そのものの状況

a. ʧíhoorera ～ bíhoorera (m), nábíhoorera (f.) < ʧíhoorera (sg.), bíhoorera (pl.)「ひこ生え」
両親はこの子の前に何人もの子供を亡くしている。

b. bíhondá「もう取れなくなったバナナ畑」
両親が年老いて，もう子供はできないだろうと思っていたらできた。

4. 子供の際立った身体的特徴

a. máhámbá (m.), námáhámbá (f.) < máhámbá「6 本目の指」
6 本指で生まれてきた子供。

b. ----- (m.),[8] n'ésubá (f.) < ésubá「太陽」
太陽のように肌の色が白く生まれてきた子供。

5. 家族の状況

a. málírá「喪，葬式」
親族が死に，喪に服していた時に生まれた子供。

b. bíkáyi「物，道具」
引越しの時生まれた子供。

c. lúéndó「旅」
両親が旅に出ていた時に生まれた子供。

6. 農耕，狩猟採集あるいは自然的状況

a. hámupunge (m.), námupunde (f.) < mupunge (sg.), mipunge (pl.)「米」
米の収穫期に生まれた子供。

b. múkúmbí「山アラシ」
父親が山アラシを捕ってきた日に生まれた子供。

c. múbisa ～ hamúbisa (m.), kábisa ～ námúbisa (f.) < múbisa (sg.), míbisa (pl.)「長雨」
長雨の日に生まれた子供。

7. 時事的事柄

a. hábitá (m.) / nábiaá (f.)「戦争」
戦争の時に生まれた子供。

b. mbárátá「税金」

---

[8] 男性名は見あたらない。

植民地時代，税金を払い出した時に生まれた子供。

8. 人名に由来するもの

a.　lulú (m.), ----- (f.)

独立前この地方に住んでいたベルギー人の名前より（Loulou?）。

b.　lasí (m.), nálasí (f.)

Loulou (?) の同僚のベルギー人の名前より（Ladis?）。こっちの方が評判がよかったらしく，女性名もある。

3.3. 双子の名前

アフリカでは，双子（テンボ語 máahá）の誕生はいつの時代でも一種独特なものと見なされる。命名においても同様である。テンボ族の命名は，命名時における命名者の一番の関心事が子供の名前となって現れてくるのであるが，双子の場合は，周りにどんなことがあろうとも，名前は前もって決まっている。双子の誕生は，それだけ，大きなインパクトのある出来事であるということである。

最初に生まれた第 1 子は，男の子の場合は形容詞 -kulu「大きい」より派生された kákuru と命名されるが，女の子の場合は ńguó と言う。この ńguó というのは，名詞 lúkuó「罵声（sg.）」の複数形である。言い伝えによると，かつては，双子が生まれると村人がその家に集まってきて，双子の父親との間で儀礼的な罵声の浴びせ合いをしたという（現在は行っていない）。この ńguó「罵声（pl.）」という名前はその名残りではないかと思われる。第 2 子の名の kátóto と ʧítóto は，形容詞 -tóto「小さい」から派生されている [9]。双子の後に生まれた子は，男女に拘わらず ʧisa となる [10]。ついでながら，双子の父親は habáahá (sg.), báhabáahá (pl.)，そして母親は nábáahá (sg.), banábáahá (pl.) と呼ばれる。

(4)　テンボ族の双子の名前

	男	女
第 1 子	kákuru	ńguó
第 2 子	kátóto	ʧítóto
双子の後に生まれた子	ʧisa	ʧisa

[9] 一般に，接頭辞 ka- は小さいものを，そして接頭辞 ʧi- は大きなものを指す。テンボ語では同種の男女のものを比べる時，男性に接頭辞 ka- が，そして女性に接頭辞 ʧi- がつくのが普通である。

[10] 現在調査しているウガンダのニョロ語では，双子の後に生まれた子供の後さらに 3 人目まで名前が決まっている。

	男	女
第 1 子	isingôma	nyangómâ
第 2 子	kátô	nyakátô
双子の後に生まれた子	kíːzâ	kíːzâ
kíːzâ の後に生まれた子	káːhwâ	káːhwâ
káːhwâ の後に生まれた子	irúːmbâ	nsúːngwâ
irúːmbâ あるいは nsúːngwâ の後に生まれた子	barôːngo	nyamáizi / nyamahúːngê

3.4. 誕生名以外の名前

テンボ族の人たちは，以上述べてきた誕生名以外に幾つかの名前を持っている。具体的には（5）のようである。いわゆる名字はない（ただし萌芽的なものはある）。

(5)
a. ésiná ly'ékúsulá　「第 2 名」
b. ésiná ly'ékútʃisulá　「自称」
c. ésiná ly'éngónde　「渾名」
d. ésiná ly'ékútʃióndérá　「自分でつける渾名」
e. ésiná ly'ébúkrísto　「キリスト教名（洗礼名）」
f. ésina lya músimú　「祖先霊名」
g. ésiná li mwá handʒá　「クラン名」
h. ésiná li mwá luhu　「リネージ名」

以下，簡単に第 2 名以下について述べる（詳しくは梶（1985a）参照）。第 2 名というのは，誕生名とは別のもう 1 つの名前という意味である。生まれたのが男の子の場合は母方のオジが，そして女の子の場合は父方のオバがつける。あるいは，その誕生名をそのまま受け継ぐ。従って，その内容は，基本的には誕生名と同じである。

自称は自らつける名前で，テンボ族の人たちは思春期を迎える 10 歳ぐらいからつけ始め 17，18 歳ぐらいにはつけ終わる。自称には，テンボ語もあるがスワヒリ語[11] のものが多い。そして男性名と女性名がはっきり分れており，男性名は文明的な格好良さを，そして女性名は美しさを示すものが多いという特徴がある。ただ，自称はあまり深読みすべきではない。例えば sabúni「石鹸」であるが，これは必ずしも村で初めて石鹸を買ったとか使った人と言っているわけではなく，物自体の珍しさと同時に sabúni というテンボ語にはない子音・母音の響きを楽しんでいるのである。

(6)

男性名	女性名
a. sabúni <Sw. sabuni「石鹸」	a. maúa <Sw. maua「花」
b. saáni < Sw. sahani「皿」	b. maráʃi <Sw. marasi「香水」
c. kufúli <Sw. kufuli「錠前」	c. mayi sáfi <Sw. mayi safi「きれいな水」
d tʃiraúli <Sw. kirauli「ガラスのコップ」	d. shingo-népa <Sw.「首の長い女」
e. liméti <Fr. allumette「マッチ」	e. nángubuka「背が高くてスラッとした女性」
f. pêngere <Fr. épingle「安全ピン」	
g. fandíli <Fr. voiture「車」	

[11] ここで言うスワヒリ語とはスワヒリ語コンゴ方言のことである。例えば kirauli (sg.)「ガラスのコップ」であるが，これはタンザニアなどの東アフリカのスワヒリ語では bilauri (sg.,pl.) である。「水」も東アフリカのスワヒリ語では多くは maji と言うがコンゴでは mayi と言う。

渾名は5，6歳になって近所の子供たちと遊ぶようになってつくものが多いが，子供に際立った身体特徴があると，出生時に大人がつけることもある。命名法は，(7.1a) の lúhuulu「黒い毛虫」が「色の黒い子」を表すように，物からの連想が多いが，(7.4) のように職業に由来するものもある。なお (7.3a) の bíkinja「質，担保 (pl.)」であるが，これがなぜ「母親の出て行った子」の意味になるかと言えば，出て行った母親は子供を担保として家に残しているわけである。それでその子は近所の悪ガキに「担保，担保」と囃されるのである。

(7)　1.　体つき・体質
　　a. lúhuulu「色の黒い子」<lúhuulu「黒い毛虫の一種」
　　b. nábyambúnu「背が低くて丸い子」<ʧambúnu「短くて太いタイプのバナナ」
　　2.　性格・態度・癖
　　a. bíkalí「意地の悪い人」< 形容詞 -kalí「意地の悪い」
　　b. kasukú「洟垂れ小僧」<musukú「樹液を出す木の一種」
　　3.　家庭の状況
　　a. bíkinja「母親の出て行った子」<bíkinja「質，担保 (pl.)」
　　b. kásiwa[12]「兄弟が全員死んで1人残った子」<-si-w-「残される」
　　4.　職業
　　a. ʧíbámbá「太鼓をつくる人」
　　b. kabénga「歯を削る人」

テンボ族の人たちはしばしば自分で渾名をつけることがある。これは自虐的，あるいは自己主張的なものが多い。

(8)　a. ʧanáberé「起こること」
　　b. káʃérú「大酒飲み」＜「樹皮布」
　　c. mulirírwa「切望される人間」
　　d. kámoomoo「誰とでも寝る人間」＜「砂蚤」

(8.a) は，Tʃá ʧanáberé í wanámbirwé ʧí.「起こることは何でも自分のせいにされる。」から来ている。(8.b) の káʃérú とは「樹皮布」のことである。イチジク科の樹木の皮をなめして作る。これは水洗いできないので，汚いというイメージがある。同様に，大酒飲みも酔っぱらうと，そこいら中に寝転ぶので汚いというイメージがある。この2つが結びついて káʃérú「樹皮布」が「大酒飲み」という意味になるのである。(8.c) の kámoomoo とは「砂蚤」のことである。日本の蚤と同じような姿形をしているが，これが地面に住んでいて人の足にとりつく。この砂蚤は誰にでもとりつくので，そこから「誰とでも寝る人間」の比喩として用いられる。

テンボの人たちは，少なくとも表面上はキリスト教徒で，それぞれ洗礼名を持っ

[12] この名は誕生名としては「父親の死後生まれた子」の意味になる。

ている。フランス語系なので（9）の様である（バプティスト派などプロテスタント系も多くいるため，一部英語系の名前もある）。

（9）　a.　男性：Jean-Pierre, Paul, Philippe, Pascal, …
　　b.　女性：Antoinette, Marie, Claudine, Rebecca,…

祖先霊名というのはごく一部の人のみが持つ名前である。テンボの社会では人は死ぬとすべて霊となるが，その中でもいくつか特徴的なパーソナリティーを持った霊がおり，各リネージの守護神として信仰の対象となる。そして，人々と霊との媒介者として子供が 1 人選ばれ，その子は，（10）のような霊の名前で呼ばれる。

（10）　kálíndá, hánge, …

テンボ族社会はクラン社会であり，すべてのテンボ人は何らかのクランに属している（全部で約 30 ある）。クランというのは外婚制の単位であり，同じクランの人間同士は結婚できないため，自分のクラン名を知らないテンボ人はいない。このクラン名というのは，本来個人が持つ属性であり名前ではない。しかし結婚した女性は嫁ぎ先で，いわば渾名としてクラン名で呼ばれることがある。リネージ名もほぼ同様である。

（11）　クラン名の例 [13]

成員 1 人	複数	クラン出身地	既婚女性の渾名として
múkúmbí	bákúmbí	búkúmbí	nábúkúmbí
mwiʃí	beʃí	bwiʃí	nábwiʃí
múbutétsú	bábutétsú	búbutétsú	nábúbutétsú
múkónʤo	bákónʤo	búkónʤo	nábúkónʤo

4. レガ族の知恵の紐

レガ族はコンゴ東部の森林地帯に住む農耕民である。広い地域に住み人口は総計 100 万人近くいると思われる。ここで示すデータは，コンゴ東部のホンボ地域からイテベロ地域に住む北東レガの一グループ，カノ族において得られたものである [14]。

レガ族（カノ族）は一般に列状集落を作り，その村の中心に集会所がある。そしてその集会所にはレガ語で mutánga (sg.), mitánga (pl.) と呼ばれる紐が通っていて，その紐には南京豆の殻，犬の歯，消し炭など，一見ガラクタと思われるものが数 10 ぶら下がっている [15]。そしてその 1 つ 1 つが諺・格言に対応しているのである。

---

[13] 接頭辞 mu- は人間の単数を，ba- は人間の複数を，bu- は性質，土地を，そして na- は女性を表す。
[14] 国際 SIL（Lewis 2009: 110）は，カノ族をレガ族とは別のグループ（人口 3,500 人）として立てている。
[15] 家族の中には集落から離れ 1 家族のみで生活している場合もあるが，そういう場合にも，

写真１　レガ族の集会所

写真２　レガ族の集会所に吊るされた「知恵の紐」

ぶら下げられている物には自然物と人工物があるが，その比率は自然物が約 70%，そして人工物が約 30% である。カヌーや丸太など大きいものはぶら下げることができないのでミニチュアを作りぶら下げている。

この「知恵の紐」の特徴の１つは，そのビジュアル性である。諺というのは，普通われわれは書物で読んだり，人が口にするのを聞いたりするものであって，それが視覚化されることはまずない。しかしレガの人たちは，紐に通した物で以って表現するのである。以下幾つか例を紹介する（詳しくは梶（1991b）参照）。

（12）　吊るされている物の例

1. lwekú「ラフィア・ヤシの若葉の繊維」

Busoʃú nusoʃú bwá walwekú bwámwaikíʃɛ́ ku mpalu íntsayi.

「ラフィア･ヤシの若葉の繊維は，柔らかいが故に，あらゆる仕事が可能となった。」

ラフィア・ヤシの若葉からとれる繊維は本来糸というもののなかった彼らにとって万能の繊維である。ロープやむしろはもちろんのこと，服もこれで編んだ。また薬の材料にもなる。その意味は，もし人が柔軟であったら何でもすることができる。ちょうど，ラフィア・ヤシの若葉の繊維が柔らかいが故にあらゆる仕事が可能となったように，ということである。

2. mukángalyá「消し炭」

Kámukángalyá ísumba, bɛndaá indungu báʃwa.

「火は消え森へ行った者は村へ帰る。」

人は他の人の助けがあって初めて仕事ができる。もし人の助けがなかったら何もすることができない，ちょうど，森に狩りに出かけた村人が火が消えたら村に帰らざるをえないように。村人が森に狩りに行くと，まず最初に小屋

軒下にこの mutánga は吊るしてある。ただしぶら下げてある物は多くはなく，数個というのが普通である。

を建て火を起こす。火は食事の用意をしたり暖を取るのに必要なものである。狩りに行く時も火は消さず熾きにしておく。ここで「火」（火はぶら下げられないので消し炭で代用）とは，人の社会基盤を支える兄弟や友人のことである。1 人では暖は得られないのだ。

3. kíntsalé「雑草の一種」

Kíntsalé ntína ibúnda áʃimiʃɛ mulungu.

「体の小さいキンツァレが庭を占拠した。」

現地語で kíntsalé と呼ばれる雑草がある。小さく，そして最初はひっそりと庭先に生える。全く無視しても差支えない存在であるが，放っておけば庭中にはびこり，しかも根を深く下ろすため除去しようと思っても，もはや手に負えなくなる。意味は，たとえ人は見かけは悪くても決して侮ってはいけない，侮ると後でひどい目にあう，ということである。

4. kantasntsá「蠅追い」

Kantasntsá wa ku mwělɔ, muɛni watúkílɛ́ ku iʃúla úwabatúláníʃɛ́.

「蠅追いが村の者なら蠅も村の者。外部の者が 2 人の仲を引き裂く。」

人が怪我をしていると蠅がよく傷口にたかりに来る。そして人は追い払う。また来ると，また追い払う。これは暇を持て余した老人がよくやることで，一種の暇つぶしである。ある日，そうやって老人が蠅を追い払っている時，そこに人が通りかかり，「なぜ蠅を叩いて殺さないんだ。」と言う。老人はそうかと思い叩いて殺す。するともう蠅は来てくれないのである。これは兄弟や夫婦がちょっと喧嘩をしていると，近所の人など外部の人が止めに入るのであるが，それが却って関係を悪くすることがあるということの比喩として用いられる。

5. kasukú「たいまつ」

Kasukú námúloʃá ntsela, bánmunǎtá matáma.

「たいまつは道を照らし，そして人はそのほっぺたをつねる。」

たいまつとは樹液を固めたものである。30 cm ぐらいの長さに延ばし，それを乾いた草で巻いていく。そして先に火をつけると赤い火がつく。しばらく燃やすと煤が溜まってきて火が弱くなる。続けて火を燃やすには 2 つの方法がある。1 つは，草か木の枝で煤を払う方法である。これはたいまつを長持ちさせるいい方法である。もう 1 つは，たいまつを持った手でたいまつをキュッキュと押す方法である。そうすれば樹液が中から押し出され，先端が赤く火が燃える。しかし，これはたいまつを早く消費する悪い方法である。ここはこの悪い方法を念頭においている。たいまつはあなたのために道を照らすといういいことをしているのに，あなたは彼のほっぺたをつねっているというわけである。実際，人はいいことをしてくれている人に対して悪く報いることがある。それを表すために，たいまつを紐にぶら下げているのである（ただし，たいまつは大きいのでミニチュアで代用）。

6. mbálá「木の実の一種」

Bulúlú bwá wambálá mu áʧǎta mu bálalanganilɛ.

「ンバラの兄弟は木の上で別れる。」

現地語で bubálá と呼ばれる木がある。この木は大きな莢を作り，その中に3～4個の薄っぺらいmbálá と呼ばれる実が入っている。この莢は乾季にパーンと大きな音を出し割れ，その中から実が飛び出し，地面に落ちる。そして落ちた実の辿る運命は様々である。子供に食べられるかもしれないし，落ち所が悪くそのまま朽ちるかもしれない。しかし中にはうまく発芽するものもある。人間の世も同様である。一緒に生まれた兄弟も死ぬのは別々なのである。

7. lukwɛ lwá mubinga nu iyamba lyá kabánga「木登りハイラックスの皮とセンザンコウの鱗」

Mubélá wámȧ́náá mubinga ûwítílê kabánga.

「木登りハイラックスの鳴き声がセンザンコウを殺した。」

木登りハイラックスは夜行性の小動物である。昼間は木の高い所に棲み，夕方地上に降りてきて木の実やキノコを食べる。そして夜中の3時か4時頃にまた木に登って行く。そしてその時，まるで子供が泣いているかのようにウェーン，ウェーンと鳴く。ある日のこと，村の長老がその鳴き声を聞きつけ，若者を見にやらせる。捕まえてきて食べようではないかというわけである。そして若者が鳴き声の所に行くとセンザンコウがいたというわけである。センザンコウも樹上生の動物であるが木の低い所にいる。そして若者はセンザンコウを捕ってきて，そして食べてしまった。つまり，木登りハイラックスの鳴き声がセンザンコウを殺した。センザンコウは何も悪くない。悪いと言えば，木登りハイラックスが鳴いたことである。実際，自分は何も悪くないのに，他人のせいで災難が降りかかって来ることがあるので注意が必要である。

8. kiʃúɔ「犬の鈴」

Mpímbí sá wakiʃúɔ úsikíʃê mubalɛ ku ákwila ku makila.

「犬の鈴の音が，アンティロープを網の方に追いやり，死に至らしめた。」

村人が犬を連れて網猟に行く。猟場に着くと網を張り，犬を放つ。犬の首には鈴がついている。その鈴の音を聞いたアンティロープは危ないと思い，反対の方に逃げる。しかし，そこに網が仕掛けられているのである。危険を避けた所で人は死ぬ。静かな所が却って危ないのだ。

9. lukúsá「ルクサ」（蔓性植物の一種）

Ntíndí sá walukúsá úsɔníʃê mubalɛ.

「ルクサの堅さがアンティロープを救った。」

lukúsá「ルクサ」というのは蔓性植物の一種で，この繊維をほぐして狩猟用の網を編む。従って，ここで lukúsá とは狩猟網のことである。さて狩猟用の網を張る時は強く張ってはいけない。強く張ると，獲物が掛っても跳ね返

されてしまうからだ。人の世界も同様。もしあなたが誰かを陥れようと思ったら柔和にしていなければならない。恐い顔をしていたら誰も近づかない。

10.　imbáʃí「兵隊蟻」

Bulúmɛ̌lúmɛ bwá wimbáʃí úwasuláá âtwá ku kɛ̌ya.

「傲慢な兵隊蟻が火に噛みついた。」

imbáʃí「兵隊蟻」と呼ばれる蟻がいる。幅数センチの隊列を組み，ものすごい数で移動する。列は数キロにも亘る。もしこれに襲われれば象さえも骨だけになると言われている。よく見ると小さい蟻が中央にいて，その両側を少し大きめの蟻がガードするように移動している。この蟻，特に大きい方の蟻は傲慢で，気に入らない物があれば何でも噛みつきに行く。そして一旦噛みついたものは放さない。現地の人はこれが家の中に入ってくると，かまどの火を地面に播く。そうすると傲慢な蟻は噛みつきに行く。そして死んでしまう。ここでは蟻の性格が裏目に出るのである。結論は，人は傲慢であると馬鹿なことを仕出かす。その戒めのため，この蟻を紐に吊るしておくのである。

11.　mukɛ́kɛ̂ wá kasabúmbú「カサブンブの刺」

Kasabúmbú muɔɔ wásɔmbilwɛ na mpûmba.

「カサブンブの木はキノコに嫌われている。」

現地語で kasabúmbú と呼ばれる木がある。この木は普通の木と違っていて，切って放っておいても一切キノコが生えない。全てのキノコに嫌われているのである。しかしこの木が何をしたというのだ，普通の木じゃないか，と言うわけである。人間の世界もそうである。何も悪くないのに，誰からも好かれない人がいる。

12.　kende ká muɔɔ「丸太」

Kende ká muɔɔ ntúnakɛngɛlá kɔ!, lǔsi talwísala.

「丸太は，川が増水しないと思い出されない。」

日頃は川を渡るのに橋を使っているのであるが，ある日，川が増水して橋が流された。どうしよう，どうしようと，みんなが思案していると，ある人が丸太のことを思い出し，その丸太を川に掛けてみんな渡ったというわけである。ここで丸太というのは人のことである。日頃取るに足らないと馬鹿にしている人の価値が切羽詰まった状況で初めてわかるのである。

レガ族の諺の分析を通じて思うことの１つは，彼らが自然の極めて細やかな観察者であるということである。ほんのわずかな木の枝のそよぎや，枝の形，またカタツムリや蟻などの動物の形状や性質を把握し，それを人生に重ね合わせる。実際，物について語っていながら結論は常に人間に向かっている。人間とは如何なるものか，人はどうあるべきかを常に考えている。これには彼らの呪術的思考が関係している。人と問題を起こすと呪術を掛けられるのではないかと恐れるのである。諺は呪術を掛けられないための処世術となっている。

しかしコミュニケーションとの関連で特徴的なことは，諺が視覚化されていることである。われわれは通常，諺は誰かが口にするのを聞くわけであるが，ここでは視覚化されている。無文字社会は，音によるコミュニケーションが優先する社会ではあるが，逆に視覚化されるものもあるのである。

この諺の視覚化は，もちろん彼らが無文字社会に生きているということと大いに関係している。文字がないからこそ，文字に代わる手段を記録媒体として用いるということである。この「知恵の紐」による諺の視覚化はもちろん文字ではない。しかし，もし物そのものではなく，これを様式化し何かに書き付けると，一種の象形文字の一歩手前まで来ていると言えないであろうか。

5. テンボ族の結縄

メッセージの視覚化ということでは，テンボ族の結縄も面白い。結縄はインカのキープや沖縄の縄算がよく知られているが，それらは多くは穀物の収穫高や税金を表すものである。しかし，このテンボ族の結縄はメッセージそのものを表すのである。(13) で「友達の家へ訪問に行く旨知らせる手紙」の例を示す[16]。

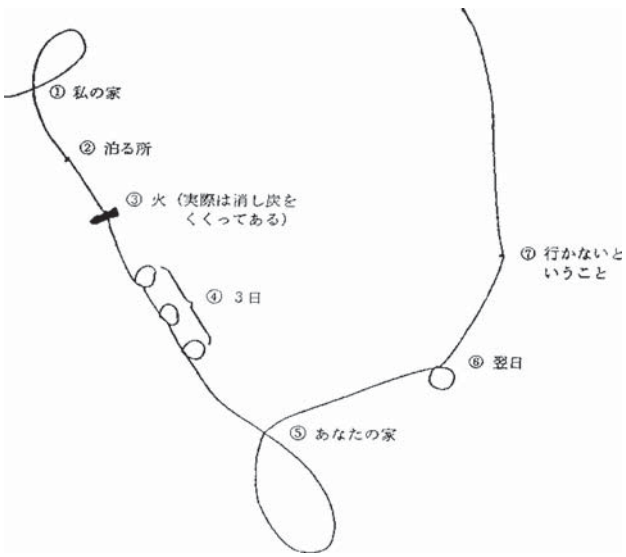


図 2　友達の家へ訪問に行く旨知らせる手紙（梶 1991a: 139 より）

(13)　Múmunú mú mwaɲí. ɲingátenga munú mwaɲí, ɲingáonɔ̃ɡíra wânú. Kútengá áú, ɲingéndé nánáénda émuʃí n'ábútsufú. Ningánáhónda alá ɲingéma émúlíró. Okú suku

[16] 他には，「人に危険が迫っていることを知らせる手紙」や「求婚の手紙」などの例がある。梶（1991a）参照。

ehátsú, ɲibóne kúíká. ɲingáíka m'olú lw'ehátsú. Ńdaikíré olú, ɲingáíka lúlunú. Ńdatʃíikíré olú, ílí ndanátʃíikíré. Wánásuuluka kwá ndaíkíré.
ここが私の家。私は自宅を出て，ここで泊まります。そして，そこを出発し，昼夜歩き続けます。（日が暮れて明かりが必要ならば）火を求めます。（この手紙をあなたが受け取ってから）3 日目に，あなたの家に着きます。もしその日に着かなかったら，翌日着きます。もしそれでも着かなかったら，私は行かないということです。私が行くとは思わないでください。

結び方であるが，①の丸いところが「私の家」である。この丸は伝統的家の形をしている。手紙の書き出しを示すために常にこの「私の家」が最初に来るようである。ここの結び方は引っ張れば解ける，いわゆる女結び（húnúkási）である。②の「旅の途中で泊まるところ」は，男結び（káfundalume）である。③は「火」を示す。実際は消し炭を結んである。旅の途中で暗くなっても，休まずに火をかがしてそのまま歩き続けるという意味。結び方は男結びである。④はわっかを 3 つ作ってある。丸 1 つが 1 日。3 つで 3 日。これは 3 昼夜歩き続けるという意味ではなく，この手紙を受け取ってから 3 日後に私は着くという意味である。結び方は，緩い男結び。⑤は「あなたの家」である。結び方は女結びである。⑥は④と同じく緩い男結びで，丸 1 つ。つまり 1 日。これは相手の家よりも後に来ているので，1 日遅れるかもしれないという意味。⑦は男結びで，きつく結んである。つまり，もはや来る望みはないという意味である。

この手紙は人に託して持って行かせる。もし相手がこちらの訪問を承諾すれば何も返してこないが，もし「来ないでくれ」という場合は，受け取った手紙に女結びの紐を結んで送り返す。

テンボ族を始め，アフリカの諸族は，いわゆる無文字社会に生きていると言われるわけであるが，彼らはわれわれが想像する以上に様々な形式的メッセージ伝達法を考案している。そのなかでも，このテンボ族の結縄は視覚的であり，レガ族の「知恵の紐」同様，他の多くの音声的手段によるメッセージ伝達法とは異なる点が注目される。

6. モンゴ族の伝達用太鼓

アフリカは声調言語が多く，太鼓で言語の音の高さをなぞってメッセージを伝達する通信法が発達している。しかし，この伝達用太鼓による長距離通信が行われるのは，主としてコンゴを中心とした熱帯林地帯とその周辺地域である。これには熱帯林内における視界の悪さが大きく作用している。熱帯林内では目による通信よりも，音による通信が有効なのである[17]。

[17] ここでは述べる余裕はないが，これには声調言語としての特性も関係している。太鼓による伝達が可能なのは，ここで紹介するモンゴ語のように，声調が固定的なタイプの言語である。

ここでは，コンゴ盆地中央部から北西部にかけて住むモンゴ族のものを紹介する。モンゴ族の伝達用太鼓は lokolé (sg.), nkolé (pl.) と呼ばれ，アンティロープや山羊の皮を張った太鼓（mbonda (sg., pl.) あるいは ngɔmɔ (sg., pl.)）とは区別される。皮を張った太鼓は主として踊りの時にリズムを刻むものである（ただし，lokolé も踊りの時に景気づけに叩かれることもある）。

なお，モンゴ族の周辺にはンゴンベ族など別の部族が住み同じく伝達用太鼓を用いているが，伝達用太鼓は，モールス信号のような恣意的に決めた信号に依るのではなく，言語の構造そのものに乗りかかっているため，それぞれの体系は別であり，お互い間の意志疎通は不可能である。

伝達される内容は，実生活のあらゆる面に亘る。人が生まれた，死んだ，戦争だから戦えといったメッセージから，重要人物が今こちらからそちらに行くからよろしく，といった内容まで様々であり，実生活に関わるほとんど全てのことが伝達の対象となる。そういう意味で lokolé は森の携帯電話と言ってもよい。

この lokolé はたんにメッセージを伝達するということではなく，その長距離伝達というところに特徴がある。この点，携帯電話と比較してみるのも面白い。まずサイズであるが，携帯電話は軽いが伝達用太鼓は重いので，持ち運びには不向きである。また携帯電話は相手と 1 対 1 の通話ができるが，伝達用太鼓は音が空中を拡散する。従って誰でも聞くことができるため，秘密の通信には不向きである。尤も，離れた村の人間と電話のように交互発信による 1 対 1 の通話は可能である。こちらが何か言えば向こうが返してきて，またこちらから発信するという通信法である。

伝達用太鼓の優れた点も幾つもある。まず電気が要らない。契約料も要らない。さらに構造が簡単なため壊れても直したり，新しいものを作ることが可能である。携帯電話は壊れたら，通常の使用者は直しようがない。通信距離は伝達用太鼓も 20，30 キロ先まで届くので，彼らの生活範囲の感覚では携帯電話とほぼ同等の機能を果たす。また幾つかの太鼓をリレーすれば数 10 キロ先までメッセージを伝達することも可能である。

6.1. 太鼓の構造

太鼓は丸太を 1 m 弱に切って中をくり抜いたもので，太鼓というより，むしろ木魚のようなものである。太鼓の各部には，人体をなぞって以下のような名前がついている（図 3 参照）。

(14)　1. boángá wá bómoto / boángá wá wájí　「女の顎」
　　2. boángá wá jende　「男の顎」
　　3. liɛ́lɛ (sg.), baɛ́lɛ (pl.)　「乳房」

それに対して，東アフリカから南アフリカにかけてのサバンナ地帯の言語は，声調（例えば高声調）が環境によってしばしば移動したり消えたりする。こういった言語では声調のみによる単語の同定が難しく，太鼓による伝達に不向きである。

4. litúnga (sg.), batúnga (pl.)　「端」
5. bompanjé (sg.), bempanjé (pl.)　「脇」
6. bɔkɔngɔ (sg.), bekɔngɔ (pl.)　「背中」
7. likunjú (sg.), bakunjú (pl.)　「腹」
8. スリット

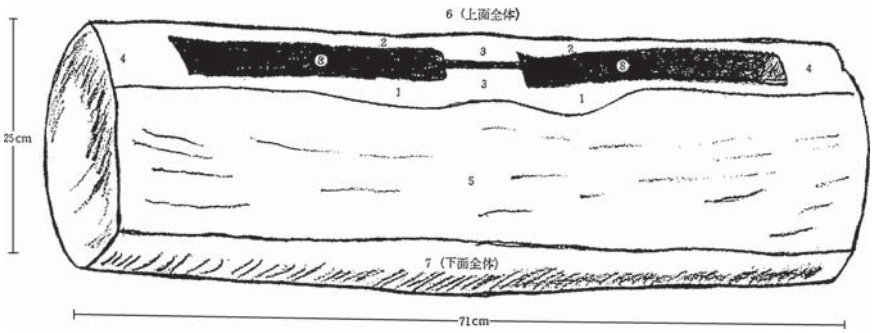


図 3　lokolé の各部（梶 1990a: 135 より）

なお太鼓の材質としては，音の響きと太鼓の耐久性のため，（15.a–d）のような堅い木が用いられる。逆にバチは，（15.e）のような軽い木が好まれる。

（15）a. bosúlú (sg.), bosúlú (pl.), *Pterocarpus sayauxii* Taub.[18]
b. bolondó (sg.), belondó (pl.), *Chlorophora excelsa* Benth.
c. liambá (sg.), baambá (pl.), *Albizzia adianthifolia* (Schum.) Wight.
d. bɔsɔngú (sg.), besɔngú (pl.), *Ceiba penthandra* (L.) Gaertn.
e. bomámbó (sg.), bemámbó (pl.), *Musanga smithii* R.Br.

6.2. 太鼓の叩き方

モンゴ語には高声調と低声調の 2 声調がある。叩き方の基本は，この 2 つの声調を太鼓でなぞることである。「女の顎」を叩けば高い音が，「男の顎」は叩けば低い音が出るようになっている。従って，高声調（アキュートアクセントで表記）は「女の顎」を，そして低声調（マークなし）は「男の顎」を叩くわけである。通常，叩くのは右の「女の顎」と「男の顎」，そして左の「女の顎」と「男の顎」の 4 か所である。左右ある「女の顎」と「男の顎」は，それぞれ同じ高さの音が出るようになっている。

叩き手は lokolé に対して直角に座り（「女の顎」，「男の顎」のいずれが手前に来てもよい），右手は右の「女の顎」と「男の顎」を，そして左手は左の「女の顎」

[18] これは生えている時の名前で切って丸太にすると bosio (sg.), besio (pl.) と呼ばれる。

と「男の顎」を叩く。叩く時は右手と左手を交互に用いる。どうして左右の手を交互に用いるかといえば，それは叩くスピードが速いからである。片手でこの前後運動を，何分間も迅速に行うのは困難である。従って，例えば Lotákáná! 低高高高「みんな集まれ」のように高声調が続いている場合でも左右の手で叩きわける。

モンゴ語では，しばしば上昇調と下降調も生じるが，これは主として母音省略あるいは融合により 2 つの声調が融合するためである。(16) のテキストでは上昇調は é のようにアキュートアクセント 2 つで示している。これは素早く高（女の顎）を 2 回叩くためである。なお，ntandélá「並べること」の初頭鼻音 n ように，鼻音だけで音節を構成している場合がある。その叩き方は，もしその前に何もなければ，つまりポーズが来れば，その成節音的鼻音は叩かれるが，前にポーズがなく前の母音と続く時は音節性を失い叩かれない。

6.3. メッセージ例

以下，子供が生まれたということを知らせるメッセージを（16）と（17）の 2 例示す。注意すべきは，いずれにおいても「子供が生まれた」という直接的な表現は出てこないということである。逆に言えば，どこを見ても子供が生まれたということが分かるのである。まず，テキストを見てみよう。

(16)　子供誕生のメッセージ（梶 1990a: 141 より）

1. Kíko, ko ko!	静かに，耳を澄ませて
2. Tólosangela, tómotsíkaka nd'élaká	我々はあなた方に伝えます，約束したように
3. Elomb'akétsi	英雄は眠っていた
4. Baájí la tolombo	女性のことです
5. Bongaj'ósálákí lisála	ンガンジョ族は畑仕事をしていました
6. Ákambákí ndé kóló kóló kóló kóló	前からずっと働いていました
7. Ákambákí ndé kala kala kala kala	以前からずっと働いていました
8. Ko ko, asóyalema	よく聞いて，そういうわけだから
9. Ɛlémbɛ́lémbɛ́ ntálɛnáká l'etóko	水蛇は湖を離れない
10. Boséká Liteji ntálɛnáká la nyangó	リテジ家の息子は母親から離れない
11. Asóyalema ndá litúmbá	彼らは家の中にいます
12. Tukulu, tukulu, tukulu	二人とも元気です
13. Asóyalema	そういうわけだから
14. Tolóng'a mbúla, tolóng'a mbúla, tolóng'a mbúla	雨の日の罠，雨の日の罠，雨の日罠

メッセージは通常，人の耳目を集める表現から始まる。(16) では，1 行目の Kíko, ko ko! である。これは訳に書いておいたように，「静かに，耳を澄ませて」の意味の慣用表現である。3 行目の Elomb'akétsi「英雄は眠っていた」というのは，子供が生まれる前兆である。5 行目の Bongaj'ósálákí lisála「ンガンジョ族は畑仕事を

していました」というのは，女性は妊娠していたということである。子供が生まれたということがはっきりと分かるのは，9 行目の Ɛlémbélémbé ntálɛnáká l'etóko「水蛇は湖を離れない」という表現である。これを聞いた時，それは「赤ちゃんは無事生まれてお母さんに抱かれてスヤスヤと眠っている」と理解しなければならない。水蛇は赤ちゃんで，湖はお母さんである。水蛇が湖にいる時心地よいように，赤ちゃんもお母さんの胸元に抱かれている時，心地よいのである。この表現は，さらにもう 1 歩踏み込んで，母子ともに健全であると言っている。14 行目の tolóng'a mbúla「雨の日の罠」というのは「慶事である」ということである。村人が獲物を捕る罠を仕掛ける時，むやみやたらと仕掛けるのではない。動物の足跡を見て慎重に行う。雨の日は足跡が分かりやすいことから，tolóng'a mbúla「雨の日の罠」が慶事を意味する慣用的表現となっている。

(17)　男の子誕生のメッセージ（Wufela 2002: 62 より）

1.	Batɔkɔ́ fala fala fala	絨毯を敷け
2.	Batɔkɔ́ ntandélá ntandélá ntandélá	絨毯を並べろ
3.	Bokáta bókátáká 1ikɔngá la nguwa	槍と盾を打ち砕く者が
4.	Áyíme lɔkɛndɔ ndá likunjú	お腹の中の旅から現れた
5.	Tósosombola bas'éká kokí kokí	我々は家族が増えたことを喜ぶ
6.	Batɔkɔ́ fala fala fala	絨毯を敷け
7.	Batɔkɔ́ ntandélá ntandélá ntandélá	絨毯を並べろ

このメッセージでは，1 行目，2 行目に Batɔkɔ́ fala fala fala「絨毯を敷け」，Batɔkɔ́ ntandélá ntandélá ntandélá「絨毯を並べろ」という表現が出てくるが，これを聞いた時，それは何か重要なもの，大切なものが来る / 来たと言っていると理解しなければならない。この表現は，通常は結婚式で花嫁の腰入れが行われる時，出発地の村から嫁ぎ先の村に向かって叩かれるのであるが，ここでは赤ちゃんを迎え入れるという意味で用いられている。3 行目の bokáta bókátáká 1ikɔngá la nguwa「槍と盾を打ち砕く戦士」というのは，「男の子」ということである。文字通り「戦士」と理解してはいけない。言い替えをしているのである。

言い替えは太鼓表現の大きな特徴である。モンゴ語の単語は 3 音節，4 音節のものが多く，子音・母音を省略すると同定が難しくなる。そのため，多くの単語が言い換えられる。上の「男の子」もそうであるが，例えば「白人」も通常の表現では bɔndélɛ́ であるが，太鼓言語では loléma dʒá lofekafeka botóm'ólóká mpulú「鳥の中の長兄であるフワフワと翼を広げて飛ぶ大コウモリ」と表現される。白人は遠くヨーロッパからわざわざ彼らの土地にやってくるわけであるが，この移動性は彼らにとって驚異的に映るらしく，大コウモリに喩えて表現されるのである。こういった言い替えが起こるのは，通常の言語での表現が短くて他と紛らわしいからであるが，同時にそれは彼らが他者をどのように特徴づけているかを示していて興味深い。

私はモンゴ語の能力不足のためテキストを散文的に訳しているが，テキストは，

実際は韻文になっていることに気をつけなければならない。音の高さにしても，（16）の 6 行目に kóló kóló kóló kóló「前からずっと」のように高声調が並ぶと，次の行は kala kala kala kala「以前からずっと」のように低声調を並べるのである。内容も，様々な比喩，格言が用いられ，これを理解するにはモンゴ語の通常の知識のみでなく，様々な比喩や方言，古語，さらには太鼓言語独特の表現など，広範囲で深い知識が必要とされる。まさに「太鼓文学」と呼べるものである。また，すべての地名，人名は，実生活のものとは別に太鼓用のものがあり，太鼓の中で 1 つの世界を構成している。モンゴ族は，現実の世界と話し言葉の世界と太鼓の世界の 3 つの世界に生きてきたのである [19]。

7. 終わりに

本稿では, 私が調査したアフリカの幾つかの言語にまつわる文化事象の例を取り, アフリカの無文字社会が如何に " 文字的 " 手段を用いてコミュニケーションを行っているかを見てきた [20]。

アフリカは長らく無文字社会と呼ばれてきた。確かに，ローマ字，アラビア文字，漢字などいわゆる“文字”が使われてきたかどうかということが問題ならば「無」文字社会と言わねばならない。しかしながら「文字」をたんにグラフィックな存在としてではなく，その機能を考慮に入れて定義し直すならば，例えば人の名前は，まさに文字の役割を果たしていると言わねばならない。

紙に書いたインクのシミとしての文字が如何にもろいものであるかは，熱帯雨林帯や砂漠地方で生活したことのある人なら実感できるはずである。熱帯雨林帯では紙に書いた文字は湿気や虫で 1 年も経たずにボロボロになるし，砂漠地帯では逆に乾燥でカサカサになる。つまり永続性がないのである。

それに対して，メッセージを人の名前に埋め込んだらどうなるであるか。その人はあと数 10 年生きる。と言うことは，数 10 年間メッセージが保持されるということである。また人は子供の時は行動範囲も限られているが，成長すれば数 10 キロを移動する。と言うことは，メッセージとしての人名は，話し言葉の持つ時間的・空間的制限を打ち破って機能すると言うことである。

このことはなぜ多くの場合，名前が諺に対応しているのかということとも関係している。すなわち，文化というものはその特徴として伝承されなければならないのであるが，ある内容を口頭で伝承する際，すなわち文字のない社会において，ただ漫然と口移しで伝えるよりも，そこに何らかの形式を導入してそれをチャンネルと

[19] 西田（1966: iii）は，モソ族の文字を扱った『生きている象形文字―モソ族の文化』の「はじめに」で「私たち人間は，ずっと二つの世界に生きてきた。二つの世界というのは，われわれをとりまく現実の世界と，特定の言葉の体系によって作り出された世界である。（中略）ところが，過去のすぐれた人たちは，さらに別のもう一つの新しい世界を作り上げた。それが文字の世界である」と，書いている。
[20] 梶（2011）にも，幾つか例が載っている。

した方がより満足な結果を期待することができる。ところで，諺というものは，その社会の凝縮された価値観の表明であり，それに名前や物を対応させるということは，それらが文化的内容を次の世代へ伝えるチャンネルとして機能しているということを意味する。ここに文化の伝承という社会にとっての死活的問題に，無文字社会が如何に対処しているかその一例を見ることができる。

人名は，表記する媒体が人間であるのに対して，レガ族の知恵の紐とテンボ族の結縄は記録媒体が物であり，表現が視覚化されている。無文字社会が音声のみによるコミュニケーションを行う社会であるという認識は改めなければならない。それに対してモンゴ族の伝達用太鼓は表記するものは無く，音そのものによる通信である。しかし，これら5つに共通するものは，表現方法の様式化である。それらはいずれもたんなる散文ではなく，形式を整えた韻文であるということである。

記録・表現媒体が音であれ，人であれ，はたまた物であれ，この表現の様式化というのはアフリカ社会のコミュニケーションの大きな特徴である。無文字社会であるから表現が無形式になるのではなく，逆に無文字社会であるからこそ，表現に一定の形式を導入し，それにより，共時的であれ通時的であれコミュニケーションをより確かなものにしようとするのである。

参　照　文　献

Hulstaert, Gustave (1957) *Dictionnaire lɔmɔ́ngɔ-français* (2 vols). Tervuren: Musée Royal du Congo Belge.

Hulstaert, Gustave (1959) *Losako, salutation solennelle des Nkundó*. Bruxelles: Académie Royale des Sciences Coloniales.

梶茂樹（1985a）「テンボ族における個人名―言語人類学的考察―」『季刊人類学』16(1): 47–88.

梶茂樹（1985b）「テンボ族の人名の言語学的特徴」『季刊人類学』16(2): 72–120.

梶茂樹（1990a）「モンゴ族の伝達用太鼓について」『アジア・アフリカ言語文化研究』40: 133–141.

梶茂樹（1990b）「リンガラ語とモンゴ語における諺の挨拶」江口一久（編）『ことば遊びの民族誌』413–425．東京：大修館書店.

梶茂樹（1991a）「テンボ族の結縄」『アジア・アフリカ言語文化研究』41: 137–142.

梶茂樹（1991b）「レガ族の知恵の紐」『アフリカ研究』38: 1–15.

梶茂樹（2011）「無文字社会の“文字”たち」町田和彦（編）『世界の文字を楽しむ小事典』78–82．東京：大修館書店.

Lewis, Paul M. (ed.) (2009) *Ethnologue, language of the world* (16th edition). Dallas: SIL International.

西田龍雄（1966）『生きている象形文字―モソ族の文化』東京：中公新書.

Wufela, Yaek'Olingo André (2002) *La littérature tambourinée en Afrique noire*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

執筆者連絡先：
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
skaji@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp

［受領日　2012年7月10日
最終原稿受理日　2012年7月24日］

Abstract

African Communication: Sounds, Humans and Visual Objects

Shigeki Kaji
Kyoto University

Africa south of the Sahara has been characterized by its orality, i.e., as societies without writing systems. In actual fact, however, we find a number of phenomena which function to record messages and events, although they may not appear to at first sight. In this article some of the methods the author studied in Africa are presented: the proverb-based greetings and the drum language of the Mongo, the naming of children and the transmitting of messages by knotted cords among the Tembo, and the suspending of objects representing proverbs by the Lega. Societies without writing might be thought of as societies where communication is always done in prose with no set form. Quite the contrary, the members of such societies resort to formal methods using proverbs, etc., to ensure communication, as if compensating for the lack of writing systems.